

# 『四種曼荼羅義』の思想について

野々部 利生

## はじめに

いわゆる真言宗学と称される学問研究において、その研究対象は大きく以下のものに分類されよう。

・『大毘盧遮那成仏神変加持経』<sup>①</sup>（以下、『大日経』）と『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』<sup>②</sup>の両部大経をはじめとする経典・儀軌

・弘法大師空海（七七四～八三五）をはじめとする諸師先徳の著作・口決類等

東密において、空海撰『即身成仏義』<sup>③</sup>を始め空海の著作に対して注釈を行うことが始まったのは、南岳房濟暹（一〇二五～一一一五）からである、というのが一般的な見解である。それまでは空海が教学を大成したために、さらなる教学研究は深化せず、主に事相の法流が発展したと言われている。確かに、空海入定より濟暹が活躍するまでの間に活躍した諸師の著作は、事相関係のものが多く、空海の著作に関するものはほとんど確認できないのである。

しかしながら、これらの見解は全く問題をはらんでいない訳ではない。その問題とは、空海の撰述でないにも拘らず空海に仮託されて伝存してきた書物の存在である。それらは研究史において、さほど脚光を浴びなかつた傾向にあ

ると思われる。しかし、空海仮託書は、空海の著作を修学し始める済暹の活躍した時代以前に成立したのも少なくない。偽書であることを抜きにして一つの文献として考えれば、書物が成立した当時の学風を窺い知ることができる。大変重要なものであり、もっと正当な評価をされても良いように感じる。よって、空海仮託書を価値のない偽書ではなく、価値のある書として扱いたいと考えている。

当稿で取り扱う『四種曼荼羅義』も空海に仮託された著作の一つであり、五大院安然（八四一〜八八九？）が自身の著作中に引用していることから、空海入定後間もなく、あるいはそう時をおかない時期に成立したと考えられている。今日まで、あまり研究対象にされていなかった一連の仮託の書のなかでは、いくつかの論考が存在する著名なものと言える。<sup>5)</sup>

それらの先行研究は、主に他文献や安然の著作を通しての考察が大半であり、『四種曼荼羅義』の思想そのものを論じたものはない。そのため、当論では『四種曼荼羅義』に説かれる思想を考察し、仮託の書という視座を設けて空海の思想との対比、その思想が『四種曼荼羅義』成立当時に存在する意義などを考えてみたい。

## 一、『四種曼荼羅義』の類本について

『四種曼荼羅義』の内容を考察する前に、『四種曼荼羅義』の類本と言われている『四種曼荼羅義口決』<sup>6)</sup>について、少しく考えを述べたい。『四種曼荼羅義』と『四種曼荼羅義口決』は、類本の関係にあると言われてきたが、実際内容的にどのような同異があるのかを考察してみたい。まず、大まかに両書の相違点を挙げれば以下のごとくである。

(一) 『四種曼荼羅義口決』は、「釈名出体」や「形像真相対門」などの十項目の段落分けがなされている。

- (二) 同じ内容の問答であつても、『四種曼茶羅義』と『四種曼茶羅義口決』では、その問答の順番が異なるなどの構成の相違がある。
- (三) 全体を通して、内容的に大同であつても文言が異なる。
- (四) 『四種曼茶羅義』にあつて『四種曼茶羅義口決』には存在しない問答、逆に『四種曼茶羅義口決』にあつて『四種曼茶羅義』にはない問答など、内容の同異が認められる。

(五) 『四種曼茶羅義』は合計六十八の問答から成るのに対して、『四種曼茶羅義口決』は七十五の問答で構成され、問答数の違いがある。それゆえ『四種曼茶羅義口決』は、『四種曼茶羅義』と比べて増広が見受けられる。

以上、五点の相違を指摘することができる。特に内容的相違を及ぼすものとして(五)が挙げられる。

それは『四種曼茶羅義口決』の項目で「息災増益調伏敬愛分別門<sup>7)</sup>」、「三部三点相配門并理智不二門<sup>8)</sup>」の箇所が『四種曼茶羅義口決』でのみで見受けられ、明らかに『四種曼茶羅義』から増広した箇所といえる。「息災増益調伏敬愛分別門」と「三部三点相配門并理智不二門」の位置は、巻末より二項目分(『弘法大師全集』において当該書の巻末より約三頁量)であり、『四種曼茶羅義』で論が足りない問答を補足して末尾に付け加えたような印象を覚える<sup>9)</sup>。

後に『四種曼茶羅義』の内容について論述するが、『四種曼茶羅義』において息災・増益・調伏・敬愛の四種法を論じる問答がある。また、三部を三点に配当する問答もあり、「息災増益調伏敬愛分別門」と「三部三点相配門并理智不二門」は、それらの問答の補論であるとも考えられる。厳密に考察すると『四種曼茶羅義』を補論したものが『四種曼茶羅義口決』なのか、『四種曼茶羅義口決』を簡略化したものが『四種曼茶羅義』なのか、多少の問題はある。しかし、当稿は『四種曼茶羅義』の内容について考察を加えるものであるため、両書の間で著しく内容の増減がある箇所を挙げるに留め、細かな相違のある箇所はその都度、指摘するものとする。

## 一、『四種曼荼羅義』所説の四種曼荼羅の概要

『四種曼荼羅義』は、まず四種曼荼羅について概説する。最初に

問ふ、四種曼荼羅とは何ぞ。

答ふ、一には摩訶曼荼羅、二には三昧耶曼荼羅、三には羯磨曼荼羅、四には達磨曼荼羅なり。

(中略)

問ふ、漢にはまさに何んが翻すべき。

答ふ、大曼荼羅、平等曼荼羅、事業威儀曼荼羅、法曼荼羅と云うべきなり。<sup>10)</sup>

※書き下し、改行は筆者。また、漢字は新字に改めた。以下、同様。

という問答を挙げ、四種曼荼羅の梵漢の翻訳を述べる。そして、その後以下の原文のごとくそれぞれの曼荼羅の概念説明をする。

問ふ、何が大曼荼羅。余の三も亦然なり。

答ふ、且く画造の諸尊に於ては五大の色を以て影像を画作するは大曼荼羅。所持の刀劍、蓮華等を造するは三昧耶曼荼羅。捏・鑄・刻等の像は羯磨曼荼羅。三十七尊等の種子の字を書くは達磨曼荼羅なり。<sup>11)</sup>

これをまとめると【表一】のごとくである。

【表一】

梵語	漢語	概要
摩訶曼荼羅	大曼荼羅	五色で諸尊の絵を描く
三昧耶曼荼羅	平等曼荼羅	諸尊の所持物を造る
羯磨曼荼羅	事業威儀曼荼羅	塑造・鑄造・彫刻などの仏像
達磨曼荼羅	法曼荼羅	三十七尊などの種子を書く

四種曼荼羅の梵漢の名と概念について、平坦に解説がされている。おおよそ一般的な解釈と見て取れる。この中で、羯磨 (Karma) を「事業威儀」と漢訳している点に注目したい。羯磨の訳語として「事業」や「威儀」は単位で用いられることが常であつて、それらを併用する事例はごく稀である。

「事業威儀」という訳語は、経典や儀軌と比較して『秘密曼荼羅十住心論』<sup>12)</sup>を始め、空海の諸著作において多用されている。この点から、少なくとも『四種曼荼羅義』所説の四種曼荼羅は、空海の四種曼荼羅の概念に影響を受けている、ないし参考になっているものと考えてよいだろう。

次に『四種曼荼羅義』で、曼荼羅というものの訳語について詳しく問答が交わされている。すなわち、

問ふ、何が故にか摩訶・三昧耶等を翻じて、曼荼羅を翻ぜず。

答ふ、此れ亦、翻ずべし。

問ふ、何んがこれを翻ずる。

答ふ、此を翻ずるに新古の二翻有り。

問ふ、其の二義、何ん。

答ふ、古人は壇と翻じ、新人は輪円具足と翻す。

答ふ「問ふ」、古人、壇と翻すには何の悪きこと有てか新人、輪円具足と翻す。

答ふ、古人の壇とは義単にして具ならず。新人、輪円具足と称するは義具にして備れり。

問ふ、壇と翻するは単にして輪円と翻するは具なりとは何ん。

答ふ、古人、壇と称するは唯坦然として平なる義をのみ取つて余の三密・四智印等、無量の名義を欠す。新人、輪円具足といえるは諸義理成就して欠少すること無し。

問ふ、坦然として平なりとは何ぞ。輪円具足とは何ぞや。

答ふ、坦然とは西国の俗法、天尊等を祭るに土を封じて平ならしむるを壇とし、輪円とはしばらく車輪の轂・輞・輻具して後、一輪を成す。一物をも欠すれば輪ならざるが如し。故に具足と云ふ。

問ふ、若し輪円具足の外に又義具有りや。

答ふ、具有り。

問ふ、何ん。

答ふ、無過上・無比味等の義なり。<sup>13)</sup>

という問答である。曼荼羅は旧訳で「壇」と翻訳し、新訳では「輪円具足」と翻訳される。旧訳は単純に神々を祀る修法壇としての曼荼羅の意味しか備わつておらず、輪円具足とは喩えるならば、タイヤのハブ・ホイール・スポークが合わさつて一つのタイヤを構成しているさま（全ての徳が備わっているさま）を表している。それは、（これ以上比較するものがないため）無過上・無比味の意味もあると説かれている。このように、『四種曼荼羅義』での曼荼羅とは、壇・輪円具足・無過上・無比味という意味があることを主張している。

勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』では、空海の曼荼羅の定義について諸著作を精査している。それをまとめ

れば以下のごとくである。

『平城天皇灌頂文』<sup>(14)</sup> 所説

(一) 無比味・無上味、(二) 輪円満足

『五部陀羅尼問答偈讚宗秘論』<sup>(15)</sup> 所説

(一) 聚集の義、(二) 発生の義、(三) 醍醐上味、(四) 壇の義、(五) 輪円具足の義

『大日経疏要文記』<sup>(16)</sup> 所説

(一) 輪円の義、(二) 発生の義、(三) 聚集の義

勝又師は「弘法大師の理解している曼荼羅の語義についてはいずれも大日経疏の説によつてゐることは明らかである。」<sup>(17)</sup>として、主に空海の曼荼羅という語の解釈は、『大日経疏』<sup>(18)</sup>の思想に拠つたものであるとの見解を示している。

そして四種曼荼羅について、『大日経』<sup>(19)</sup>には四種の曼荼羅は見いだせず、『金剛頂経』系統の經典において初めて四種類以上の曼荼羅が確認できると述べている。

なぜなら『即身成仏義』で「大日経に説かく、一切如来に三種の秘密身あり。謂く字・印・形像なり。」<sup>(20)</sup>と『大日経』の説を挙げるが、ここでは字・法曼荼羅、印・三昧耶曼荼羅、形像・大曼荼羅の三種のみ<sup>(21)</sup>、四種類以上の曼荼羅が確認できるのは、『金剛頂経瑜伽十八会指帰』<sup>(22)</sup>や『大衆金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』<sup>(23)</sup>『都部陀羅尼目』<sup>(24)</sup>などの『金剛頂経』系統の經典であるからである。しかし勝又師は、空海が『即身成仏義』などで主張する四種曼荼羅と、『金剛頂経』系統の經典所説の四種曼荼羅とは概念的に必ずしも同一ではないと述べる。<sup>(25)</sup>

つまり空海は、四種類の曼荼羅に関しては『金剛頂経』系統の思想を踏襲し、曼荼羅という語義については『大日経疏』の説に依拠し、それらの思想から影響を受け、独自の四種曼荼羅思想を構築したものと考えられる。

それら空海の四種曼荼羅の概念と『四種曼荼羅義』所説の四種曼荼羅を対比してみたい。四種曼荼羅について最も体系的に述べられている『即身成仏義』における定義と、『四種曼荼羅義』における定義を【表二】に示した。

【表二】

	『即身成仏義』	『四種曼荼羅義』
大曼荼羅	一一の仏菩薩の相好の身なり。又、其の形像を綵画するを大曼荼羅と名く。 <sup>26)</sup>	画造の諸尊に於ては、五大の色を以て影像を画作するは大曼荼羅。 <sup>27)</sup>
三昧耶曼荼羅	所持の標幟・刀劍・輪宝・金剛・蓮華等の類、是れなり。若し其の像を画する、亦是れなり。 <sup>28)</sup>	所持の刀劍・蓮華等を造するは三昧耶曼荼羅。 <sup>29)</sup>
法曼荼羅	本尊の種子真言なり。若し其の種子の字を各おの本位に書く、是れなり。 <sup>30)</sup>	三十七尊等の種子の字を書くは達磨曼荼羅。 <sup>31)</sup>
羯磨曼荼羅	諸仏菩薩等の種々の威儀事業、若しくは鑄、若しくは捏等亦是なり。 <sup>32)</sup>	捏・鑄・刻等の像は羯磨曼荼羅。 <sup>33)</sup>

以上を見比べると、空海の考えていた四種曼荼羅と『四種曼荼羅義』における四種曼荼羅は、同等の定義と見做すことができる。そして、曼荼羅という語の定義についても対比させてみたい。上述した『四種曼荼羅義』の概念を対比させると左表のごとくである。

【表三】

空海の諸著作（勝又説）	『四種曼荼羅義』
<ul style="list-style-type: none"> <li>・無比味、無上味</li> <li>・輪円満足（輪円具足）</li> <li>・聚集</li> <li>・発生</li> <li>・醍醐上味</li> <li>・壇</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・壇</li> <li>・輪円具足</li> <li>・無过上、無比味</li> </ul>

これも一見して、空海が示している曼荼羅の概念と『四種曼荼羅義』所説の曼荼羅の概念は類似するものがある。前述したように、空海は様々な経典・論書の思想を組み合わせて四種曼荼羅思想を組み立てている。そのため、『四種曼荼羅義』が空海の著作を参考にしたのか、『大日経疏』などを参考して書かれたものなのか断定することはできない。しかし、訳語や四種曼荼羅の定義など、空海の著作と類似するものが多数あり、どちらかと言えば空海の著作に影響を受けたものであると考えられる。

以上のように、『四種曼荼羅義』の内容と空海教学とを対比・検討すると

- ・『四種曼荼羅義』所説の四種曼荼羅は、空海が示す四種曼荼羅の概念と同等である。
  - ・訳語（事業威儀など）が類似している。
  - ・曼荼羅の定義が類似している。
  - ・『四種曼荼羅義』の説明は、簡略的に説明されていることから、何らかの思想の概略であると思われる。
- となり、これら四点を以って『四種曼荼羅義』は空海の思想に準拠しているものである可能性を指摘しておきたい。

### 三、四種曼茶羅各具

四種曼茶羅がいかなるものなのか示したうえで、『四種曼茶羅義』では四種曼茶羅に関する様々な教理が説かれる。以下に示した『四種曼茶羅義』の文章は、各四種曼茶羅が他の三曼茶羅を具すという思想である。

問ふ、四種曼茶羅に於て、且く大曼茶羅の所に於て三昧耶曼茶羅・羯磨・法等の三を具し、平等の所に於ても大羯法の三曼茶羅を具し、羯磨の所に於ても大三法の三を具し、法曼茶羅の所に於ても大三羯の三種を具すや。

答ふ、爾なり。これを具せり。

問ふ、何んがこれを具す。

答ふ、大曼茶羅の所に於て五大の遍ずるは是れ三昧耶なり。手足等の威儀の相有るは是れ羯磨なり。軌則軌持の義有るは是れ法曼茶羅なり。三昧耶の所に於て五大の色有るは大なり。屈曲威儀の相あるは羯磨なり。軌則軌持の義有るは法曼茶羅なり。羯磨曼茶羅の所に於て、五大の色は大なり。此の五大の遍ずるは三昧耶なり。軌則軌持有るは即ち法なり。法曼茶羅の所に於て、五大の色は則ち大なり。五大の遍ずるは三なり。屈曲威儀の相あるは羯磨曼茶羅なり。<sup>(34)</sup>

※傍線筆者。以下同様。

このように、大曼茶羅に三・羯・法の三曼茶羅、三昧耶曼茶羅に大・羯・法の三曼茶羅、羯磨曼茶羅に大・三・法の三曼茶羅、法曼茶羅に大・三・羯の三曼茶羅というように、それぞれの曼茶羅が他の三曼茶羅を具す思想である。

この思想は後代において、いわゆる同体の四曼・各具の四曼という思想に該当する考え方である。<sup>(35)</sup>今日、『即身成仏義』を始め、空海真撰の著作として扱われているものには、別体の四曼のみ確認でき、同体の四曼の思想は確認できない。

しかし、空海の口伝を高雄僧正真濟（八〇〇〜八六〇）が記したとされる『高雄口決』<sup>(36)</sup>には

此の四種曼荼羅は各、互いに具足す。大曼荼羅は余の三を具す所なり。又、法曼荼羅も余の三曼荼羅を具す所なり。<sup>(37)</sup>

というように四曼各具の思想が見受けられる。口決である以上、『高雄口決』に説かれる内容が、すなわち空海の思想であると断定するのは逡巡するところである。『高雄口決』そのものの信憑性が判然としないため、ここではこれ以上の言及を避けたい。

いずれにせよ、それぞれの曼荼羅が他の三曼荼羅を具す思想は、空海の諸著作中では明言されていない。『即身成仏義』中の「四種曼荼羅各不離」や

字とは法曼荼羅なり。印とは謂く種種の幟幟即ち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身即ち大曼荼羅なり。此の三種の身に各おの威儀事業を具す。是れ羯磨曼荼羅と名く。<sup>(38)</sup>

という文章を以って、四種曼荼羅各具（同体の四曼）の思想を見出すこともできなくはない。しかし、不離（離れないこと）と具足（備えていること）は、同様の概念とは言い難い。また、これらの解釈が同等ならば、後世に同体の四曼・別体の四曼という考え方は生まれなかったと思われる。

よって、安然の活躍する頃に『四種曼荼羅義』が成立していたとすると、早い段階で『即身成仏義』の四種曼荼羅思想に対して、新たな解釈が生まれていたことになろう。

#### 四、三宝・三密・三部・三点への配当

『四種曼荼羅義』には、四種曼荼羅に三宝（仏宝・法宝・僧宝）、三密（身密・語密・意密）、三部（仏部・蓮華部・金剛部）、三点（解脱点・法身点・般若点）を配当する思想が見受けられる。原文を逐一挙げれば煩雑になるため割愛するが、それぞれの配当をまとめると以下の表のような配当になる。

【表四】

大曼荼羅	仏宝	身密	仏部	解脱点
法曼荼羅	法宝	語密	蓮華部	法身点
三昧耶曼荼羅	僧宝	意密	金剛部	般若点
羯磨曼荼羅	三宝全て			

しかしながら、なぜこのような配当なのかという疑問が生まれる。それについて『四種曼荼羅義』では、

問ふ、且く大・法の二は然るべし。何が故にか三昧耶は僧宝に相当する。

答ふ、僧とは衆の義なり。亦、和合の義なり。故に然もこれに配す。

問ふ、三昧耶は何の義の故にか爾か云ふ。

答ふ、五大とは衆の義なり。此れ一味平等にして乖諍無く、而も和合する故に似て相当す。<sup>39)</sup>

という理論を提示している。

大曼荼羅と法曼荼羅については、「然るべし」として立ち入っていない。三昧耶曼荼羅の配当について、僧とは衆や和合の意味がある。そして、五大は衆の意味があり一味平等で争い（乖諍）がなく和合するから三昧耶曼荼羅に配当すると述べている。

僧、つまり sangha の漢訳である衆や和合を取り上げているが、ここでは教団としての僧伽ではなく、解釈を広げて物が集まっている様子を表す語として、衆や和合を用いているように感じる。そして、三昧耶 (samaya) の「集云」などの意味をとって、三昧耶曼荼羅に僧宝を配当しているものと思われる。

『四種曼荼羅義』中の別の箇所では三昧耶曼荼羅について

答ふ、此の地等の五種、一切処に遍ずるが故に大と曰ふ。謂く平等曼荼羅とは此の五大の色、有情非情に遍じて平等に成ずるが故に平等曼荼羅と曰ふ。<sup>40</sup>

と説く。五大が有情・非情に隔てなく平等に遍満している。そのため非情である諸尊の持物にも五大が平等に備わっているから平等（＝三昧耶）曼荼羅なのだという解説をしている。つまり、三昧耶曼荼羅には五大が平等に遍満し、その様子はまさに五大が衆・和合・集云している（寄り集まっている）ため僧法に配当するという解釈を示している。次に羯磨曼荼羅の配当理由について

問ふ、羯磨は何なる義辺を以てか三宝に通ずるや。

答ふ、此れ則ち前の如く事業威儀の義なり。其の事業と作業・業用の義なり。仏宝の法然として五大の所成なるは是れ作業なり。此の仏宝、説法・神通の用を起すは是れ業用なり。法宝の法然として五大の所作なるは作業な

り。此れ説法・神通の用を発すは是れ業用なり。僧宝も亦、是の如く具足するが故に三に通ずると云ふ。

問ふ、仏宝に法僧の二宝を具するに據らば法僧の所にも亦、仏僧と法仏とを具すや。

答ふ、爾なり。これを具す。

問ふ、意何ん。

答ふ、仏宝の物の為にか軌則・軌持の義有るは法なり。亦、五大の所造なるは僧宝なり。法宝の覺了の義は是れ仏なり。五大の所成なるは僧宝なり。僧宝の覺了の義有るは仏なり。軌則・軌持の義あるは法なり。<sup>(4)</sup>

という問答がなされる。

大まかに上記の文章を読解したい。羯磨曼荼羅が三宝それぞれに配当される理由について、それぞれの三宝が五大所成であり（作業）であり、それらが説法や神通という行為（業用）を起こすというのである。それによって、それぞれの三宝に羯磨（事業・はたらき）があるので、羯磨曼荼羅がそれぞれの三宝に配当されるという論理展開がなされている。

そして、仏宝に法宝・僧宝、法宝に仏宝・僧宝というようにそれぞれの三宝に他の二宝が具足する思想を提示している。しかし、具足する理由の説明文（傍線部）は、前記の問答と重複している。よって、これ以上『四種曼荼羅義』が何を主張したいのか、その深層を理解することは困難といえる。

次に『四種曼荼羅義』では、【表四】のように三密・三部・三点の配当が紹介される。しかし配当が紹介されるのみで、なぜこのような配当をするかについて教理的な理由は説かれていない。

同じ数字の術語同士を語呂合わせ的に配当することは、仏教經典・論書等で頻繁に行われることである。日本密教においても、決して珍しいことではない。特に教学が隆盛する平安末期頃からは、同数の用語を配当することは度々目にする手法である。

空海の著作では、『即身成仏義』中の二頌八句に体・相・用の三大を配当する思想など、他の思想同士を組み合わせることはあるが、同数の用語を組み合わせることは、滅多にないと思われる。あつたとしても、「是の五色は即ち是れ五大の色なり」<sup>(42)</sup> というように五大と五色の関係など、配当の根拠を既存の經典などに依拠しているものであると考えられる。

つまり、空海は自らの教理を構築するために他の思想同士を組み合わせることはあるが、同数の用語であることを理由として、意識的に組み合わせることは稀である。あつたとしても限られており、論の核心的なものとは言えないと思われる。

また、『四種曼荼羅義』と同様の配当が『秘藏記』<sup>(43)</sup>に見られる。それは

三部を以て三点に宛ること如何。蓮華部をば法身に擬し、金剛部をば般若に擬し、仏部をば解脱に擬す。<sup>(44)</sup>

という、三部に三点を配当する記述である。『四種曼荼羅義』と同様の配当であるが、『秘藏記』もなぜこのような配当をするのか詳しい解説には及んでいない。

『秘藏記』も空海撰と伝えられるものの、『四種曼荼羅義』同様に後世の者が著したものと考えられている。『秘藏記』の成立年代を確定する要素は乏しく、流動的であるが少なくとも寛弘八年（一〇一一）書写の仁和寺所蔵の写本が存在するため、それ以前の成立であることは間違いないであろう。<sup>(45)</sup> けれども『四種曼荼羅義』と『秘藏記』は、両書ともに確定した成立年代がわからない以上、この配当がいずれの著作において先行されたか考察することは、仮定に過ぎないため、ここでは『秘藏記』に『四種曼荼羅義』と同様の配当が説かれていることを指摘するに留めておきたい。

## 五、四種法身への配当

『四種曼荼羅義』には、続いて四種曼荼羅に四種法身を配当する思想が見受けられる。まず、その配当を紹介すれば以下のごとくである。

〔初重〕

法曼荼羅↓自性身

大曼荼羅↓受用身

羯磨曼荼羅↓變化身

三昧耶曼荼羅↓等流身

〔二重〕

大曼荼羅↓自性身

三昧耶曼荼羅↓受用身

羯磨曼荼羅↓變化身

法曼荼羅↓等流身

〔三重〕

三昧耶曼荼羅↓自性身

法曼荼羅↓受用身

大曼荼羅↓變化身

羯磨曼荼羅↓等流身

まず、初重の配当理由について

問ふ、何が故にか初重には法曼荼羅をまさに自性身に当つべしや。余も亦、然り。

答ふ、自性身は則ち法身なるが故に、法曼荼羅は自性身に当る。大曼荼羅は自受用、他受用の二義を具するが故に。羯磨は即ち業用の義の故に。三昧耶は平等類の義なり。<sup>46)</sup>

という解説をなしている。まとめると

- ・法曼荼羅への配当について、自性身は法身であるため。
- ・大曼荼羅への配当について、自受用、他受用の二義があるため。
- ・羯磨曼荼羅への配当について、羯磨に業用の意味があるため。
- ・三昧耶曼荼羅への配当について、平等「流」類の意味があるため。<sup>47)</sup>

と、それぞれの配当理由を述べている。しかしながら、以上の説明で配当の理由が明確になったとは言い難い。次に二重、三重の配当理由が述べられる。

問ふ、後の二重の意、何ん。

答ふ、第二重には大曼荼羅を亦、法身と名く。法身は即ち自性身なるが故に。三昧耶は自性身の受用する所なるが故に。羯磨は業用即ち變化なるが故に。法曼荼羅は平等流出の義有るが故に。第三重には、三昧耶は法界体性

の故に自性なり。法曼荼羅は大曼荼羅身の受用する所なるが故に受用なり。大曼荼羅とはよく変化を発するが故に変化なり。羯磨は業用即ち等流の故に等流身に当るなり<sup>(48)</sup>。

この文章も初重同様に、極めて簡潔に配当理由が述べられており、配当理由を深く知ることはできない。

「三・三宝・三密・三部・三点への配当」で論述したことが同様に、これも同数の用語を配当するものである。そして、詳細な教理的説明は行われず、簡潔に配当が紹介されるのみである。『四種曼荼羅義』が『弘法大師全集』において見開き四頁程度の分量の著作であることを考えると、種々の配当が占める分量はかなりのものである。ある意味、配当を説くのが『四種曼荼羅義』の特徴とも言える。

## 六、壇の種類について

様々な思想や配当が提示されてきたが、終盤では壇の種類についての問答がみられる。ここで紹介する問答は、『四種曼荼羅義』の前半部分にある、曼荼羅の梵漢の異名を述べた箇所をさらに詳述したように思える。前半部分で

問ふ、坦然として平なりとは何ぞ。輪円具足とは何ぞや。

答ふ、坦然とは西国の俗法、天尊等を祭るに土を封じて平ならしむるを壇とし、輪円とはしばらく車輪の轂・輞・輻具して後一輪を成す。一物をも欠すれば輪ならざるが如し。故に具足と云ふ<sup>(49)</sup>。

という問答が存在する。そして、この問答の後、様々な思想や配当が説かれ、巻末に近い終盤で

問ふ、壇「壇」の義に於て坦然として平なりとは何ん。

答ふ、世人、処に住して天神等を祭るに土を封じて平ならせしむる。是れなり。<sup>(30)</sup>

という問答が登場する。一つの著作中に内容が重複している問答があることを考えれば、『四種曼荼羅義』は精緻な教理的論書とは、いささか性格を異にしているとも考えられる。そして

問ふ、壇の形に於て若し種有りや。

答ふ、有り。

問ふ、何ん。

答ふ、且く大日経に據らば方・円・三角・半月形の四種有り。金剛頂には円・方・三角・蓮華形・金剛形の五種等の相を説く。

問ふ、若し此を以て何物にか相当する。

答ふ、且く五輪に相配す。

問ふ、何ん。

答ふ、方は地大、則ち平等の義なり。円は水大、円満無欠少の義なり。三角は火大、猛利の義なり。半月は風大、即ち大力の義、亦損破の義なり。

問ふ、四種、五種に相当すること何ん。

答ふ、息災・増益・降伏・鉤召、心を以て当つべし。亦、五大に当る。空は「脱文」円水の故に列举す。<sup>(31)</sup>

といったように、四種ないし五種の修法壇の種類が説かれ、それに伴って息災・増益・降伏・鉤召のいわゆる四種法が紹介される。しかし、いずれの壇がいずれの修法に配当されるのか詳述されていない。

また、四種類の壇(『大日経』の説)を五輪(五大)に配当するような文章が見受けられるが、四種類の壇を用いたため空大については何も述べられていない。

そして、括弧で「脱文」と示した箇所32に脱文があると考えられる。その箇所に「空は…」とあるので、ここで空大の配当が述べられているものだったのか、少々文章としての不備も指摘することができる。

また、他の箇所でも文章の重複が確認できる。成立当初からこのような形であったのか、成立当初の『四種曼荼羅義』の内容や、構成上の変遷は一考を要する問題である。

## まとめ

『四種曼荼羅義』の思想を検討し、いくつかの特徴を見出すことができた。

まず、『四種曼荼羅義』に説かれる四種曼荼羅の概念は、空海の四種曼荼羅観と同じである。訳語や四種曼荼羅の定義等々を比較すると、空海の著作群にみられる思想を意識して構築された可能性が考えられる。しかし、空海の実想をそのまま略出したものではなく、同数の用語同士を組み合わせて配当する手法を用いて、『四種曼荼羅義』独自の思想も打ち出している。

また、全体を通して略述的であり、綿密に練られた教理を、経典などの引用を交えて展開する著作ではないことが判った。四種曼荼羅の梵漢の異名や配当などを紹介する程度で、詳しい理由などは実に簡単に済まされている。特に他の空海の著作と比較すれば、その内容の粗略さは、空海御作と考えることは妥当ではない。

よって、以上のことを踏まえ、総合的に評価すれば「空海思想を踏襲しつつも、独自の思想が展開される著作」と評することができる。

冒頭で述べたように『四種曼荼羅義』は、安然が活躍する以前には成立していた。そして、その時代は事相面が発展し、教学的著作が乏しい時代ともされている。しかし、『四種曼荼羅義』は、空海の著作を意識した形跡が窺えるし、後世の教学的著作と比較して粗略ながら種々の用語を配当する思想を確認できる。別言すれば、『四種曼荼羅義』は当時の人々が空海の著作を学び、空海教学に対して自らの解釈を施した著作と言えよう。

このように『四種曼荼羅義』を捉え直すことによつて、東密において教学が盛んではなかったと言われている当時の教学を垣間見ることができた。決定付けることは早計ではあるが、済暹まで空海の著作を修学することはなかったという定説は、検討の余地が出てきたと言えるのではなからうか。

## 註

- (1) 『大正新脩大藏經』（以下、『大正藏』）一八・一上〜五五上
- (2) 『大正藏』一八・二〇七上〜二二三上
- (3) 『弘法大師全集』（以下、『弘全』）一・五〇六〜五二〇

『即身成仏義』の撰者について空海真撰を疑う偽撰説が存在する。

古くは島地大等師の『日本仏教教学史』（中山書房 一九三三年）に端を発する問題である。その後、島地師の主張は不備があることを勝又俊教師などに指摘されている。

現在では大久保良峻師が『台密教学の研究』（法蔵館 二〇〇四年）で偽撰である可能性を指摘している他、竹内信夫氏が『空海思想』（精興社 二〇一四年）において空海を書いていない文章（後世の者のメモなど）が含まれていることを主張している。大久保師の説は

・『諸阿闍梨真言密教部類惣録』（『大正蔵』五五・二一一三中～二一一三二下。以下、『八家秘録』）に「真言宗即身成仏義四種曼荼羅義文字実相義一卷（『大正蔵』五五・二一一六中）」というように撰者名を明かさずに記していること。

・安然の著作で、『即身成仏義』を引用する際に撰者名を明かしていないこと。

・また、安然の引用する『声字実相義』のなかで、「即身義の中に積するが如し」という文言が写本によってはみられないこと（『即身成仏義』が後世に成立して、その文言が加筆された）。

・というものである。筆者としては以下の四つの理由を挙げて、大久保師の主張に疑問を呈したい。

・まず、『八家秘録』にて「真言宗即身成仏義四種曼荼羅義文字実相義一卷」といったようにセットで扱われている。空海の真撰または、真撰であると考えられていたという共通性がある。空海の著作であると認識があったからこそ、このような表記をしたと考えられる。

・『八家秘録』に収録されているということは、入唐八家のうち誰かの著作である。逆に空海でなければ、一体誰なのか具体的かつ可能性をもった人物が想定できない。少なくとも、確証はないが安然には空海の著作であるとの認識が少なからずあったものだと考えられる。

・安然の著作中に引用されていることを考えれば、名も無き僧が造作した書物や、撰者不明の書物を闇雲に引用することはないと考えられる。

・安然は『弁顕密二教論』（『弘全』一・四七四～五〇五）が閲覧できなかったのか理由は定かではないが、重要な著作である『弁顕密二教論』を一切、引用等々をしていない。そもそも当時、他宗派の著作を入手することは、困難だという可能性も考えられる。その点を鑑みれば撰述者に確証が持てなかった可能性がある。

また、竹内信夫氏は現行の『即身成仏義』について、後世の者の覚書などが混入して現在の形になったとの意見を述べている。しかしながら、学術書でないため明確な根拠が示されていない。

ただし、個人的な見解として『即身成仏義』の写本の所持者が覚書を加筆していき現行の『即身成仏義』が成立したならば、内容の増減がある類本や異本が存在しているもおかしくないと思う。そのような行為が行われていたのならば、現行本が一本しかないことに少なからず疑問が生じてくる。

以上のことを以って、『即身成仏義』は空海の実撰であるとするのが、現時点で素直な考えだと思われる。これまでの伝承を踏まえ、それを否定するだけの客観的事実と、空海でなければ一体誰が即身成仏思想を構築でき得るかを特定したうえで、初めて真撰が否定されるのであろう。当論では、『即身成仏義』を空海真撰の書としてうえで論を進めたい。

(4) 『弘全』四・二五〇～二五八

(5) 先行研究として

・真保竜敏「四種曼荼羅義の成立について」『印度学仏教学研究』第十九巻 第一号 日本印度学仏教学会  
一九七〇年 二九二～二九五頁

・勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』山喜房仏書林 一九八一年 一三五～一七八頁

・松崎恵水『四種曼荼羅義』について『大正大学研究紀要』第七二輯 一九八六年 七九～九〇頁（同著『平

安密教の研究——興教大師覚鑿を中心として——』吉川弘文館 二〇〇二年 一四三～一六一頁にも掲載。）

・別所弘淳「安然引用の『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』について」『現代密教』第二六号 二〇一五年  
一四九～一六五頁

などが挙げられる。

(6) 『弘全』四・二五九～二七一

(7) 『弘全』四・二六八

(8) 『弘全』四・二六九

(9) 現在、『四種曼荼羅義』と『四種曼荼羅義口決』の成立の前後関係は、未解明な部分が多く、流動的である。そのため、増広や補論という用語を用いるのは、相応しくない。そのため当論では、便宜上『四種曼荼羅義』が成立した後、に『四種曼荼羅義口決』が成立したことにして論を進めたい。

- (10) 『弘全』四・二五〇  
 (11) 『弘全』四・二五一  
 (12) 『弘全』一・一二五〜四一五  
 (13) 『弘全』四・二五〇〜二五一  
 (14) 『弘全』二・一五四〜一七三  
 (15) 『弘全』二・七四〜一三一  
 (16) 『弘全』一・五九三〜六一一  
 (17) 勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』山喜房仏書林 一九八一年 一四〇頁  
 (18) 『大正蔵』三九・五七九上〜七八九下(具名『大毘盧遮那加持經疏』)  
 (19) 勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』山喜房仏書林 一九八一年 一四七頁  
 (20) 『弘全』一・五二二  
 (21) 空海は三曼荼羅にそれぞれ威儀事業を具す(羯磨・働きを有している)として、『大日経』の引用文から四種曼荼羅を見出している。(通三羯磨)  
 (22) 『大正蔵』十八・二八四下〜二八七下  
 (23) 『大正蔵』十九・六〇七上〜六一一上  
 (24) 『大正蔵』十八・八九八下〜九〇〇上  
 (25) 勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』山喜房仏書林 一九八一年 一四八頁

- (26) 『弘全』一・五二二
- (27) 『弘全』四・二五一
- (28) 『弘全』一・五一二〜五二三
- (29) 『弘全』四・二五一
- (30) 『弘全』一・五一三
- (31) 『弘全』四・二五一
- (32) 『弘全』一・五一三
- (33) 『弘全』四・二五一
- (34) 『弘全』四・二五二〜二五三
- (35) 『密教大辞典』「四曼相大」の解説において、同体別体の四曼が詳しく解説されている。筆者の調べでは、同体の四曼・別体の四曼が成立し得る概念は古くからあったものの、同体の四曼・別体の四曼という用語をセットで扱っている初出は、道範(二一七八〜二二五二)撰『貞応抄』(『大正蔵』七七・六九七中〜七二四下)であると思われる。
- (36) 『大正蔵』七八・三二上〜三七下
- (37) 『大正蔵』七八・三六下
- (38) 『弘全』一・五一二
- (39) 『弘全』四・二五三
- (40) 『弘全』四・二五一
- (41) 『弘全』四・二五三〜二五四
- (42) 『声字実相義』(『弘全』一・五二七)
- (43) 『弘全』二・一〜七三

(44) 『弘全』二・七

(45) この写本については、大沢聖寛『仁和寺蔵本 秘蔵記 翻刻・校訂・現代語訳』ノンブル社 二〇〇九年において影印と翻刻が掲載されている。

『秘蔵記』の成立年代については、著名なもので

・向井隆健『『秘蔵記』成立考』『密教学研究』第一五号 日本密教学会事務局 一九八三年 五三〜六七頁

・密教文化研究所 弘法大師著作研究会『定本弘法大師全集』第五卷 密教文化研究所 一九九三年 三七〜

三八〇頁(甲田宥咩記)

・米田弘仁『『秘蔵記』の成立年代』『密教文化』第一八六号 密教研究会 一九九四年 六七〜九三頁

・大沢聖寛『秘蔵記の成立年代再考』『印度学仏教学研究』第四七巻第二号 日本印度学仏教学会 一九九九年

六二三〜六二七頁

などが挙げられる。

いずれの説も、下限年代と上限年代に五十年から百年近くの開きがあったり、『秘蔵記』の引用が確認できる文献の信憑性や成立年代が不明瞭であったりと流動的である。そのため、ここでは確実に成立したといえる、仁和寺所蔵本の書写年次である寛弘八年(一〇一一)を『秘蔵記』の成立年代としておきたい。

(46) 『弘全』四・二五五

(47) 『四種曼荼羅義口決』では、「平等類」ではなく「平等流類」となっているため、「流」を補った。

(48) 『弘全』四・二五五

(49) 『弘全』四・二五〇〜二五一

(50) 『弘全』四・二五七

(51) 『弘全』四・二五七

(52) 『弘全』第四輯・二五七頁の上部欄外に「空者下恐有脱文」との注記がある。